

浄土

昭和十年五月廿日
昭和二十四年四月二十八日
昭和二十四年五月二十五日印刷
第三種郵便物認可
毎月一冊
運輸省特別取扱
発行所
三友社

第二十五
第六号

六月号

三友



新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやみとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土 六月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

特集 — 浄土宗教学院創立十五周年記念 —

- 挨 拶……………佐藤 密雄 (2)
- 体 験……………森 赫子 (4)
- 諸行無常のはなし……………武田 泰淳 (12)
- ひじり法然……………佐藤 賢順 (22)

- 中国談話 応現神……………牧尾 良海 (28)
- 經典解説 法華経……………石上 善応 (32)
- 浄土歌壇……………岩野 喜久代 (39)
- 高僧伝 角谷隆音……………大橋 俊雄 (30)
- 扉の御法語……………(1) 小さい御出家……………(35)
- 童心仏心……………(38) 扉の御法語解説……………(40)
- 絶体の世界……………須藤 隆仙 (36)
- 法然上人御一代記 (三) —

浄土

六月号

つみおぼ十悪五逆のもの、
なおむまると信じて、小罪
おもおかさじと思ふべし。
罪人なおむまる、いかに
いわんや善人おや。
行は一念十念むなしから
ずと信じて、無間に修すべ
し。
一念なおむまる。いかに
いわんや、多念おや。

法然上人御法語



浄土

——浄土宗教学院 創立十五周年記念 特集——



戦火うづまく混迷の時代のなか、「学問の自由」と「信仰の確立」の大旗を掲げて、時代を先駆し、戦後の文化日本再建のために、他のあらゆる学会にさきがけて、京都に学術大会を開催し、爾来、その使命に邁進して参りました浄土宗教学院が、その輝しい十五年の歴史を記念して、東都のセンター、銀座山葉ホールに於て、大仏教集会を催した。

時恰かも、法然上人七百五十年御忌を眼前に迎えて、行われたこの記念の催しは、上人の芳躅を慕たう万堂を揺がす聴衆に、深い感銘をあたえた。ここに記念特集を企て、ひろく、平和とやすらぎを求める世の人々におくることとする。



佐藤 密雄

浄土宗と申しまして、皆様方におわかりにならない方も御座居ましようが、芝に増上寺、或いは、小石川に伝通院というお寺がありますが、これは、浄土宗のお寺で御座居ます。現在、東京には約、千二百程のお寺が御座居ますが、約、その半数ほどが浄土宗のお寺で御座居ます。徳川將軍が浄土宗の信者であつたせいもありましようが、江戸ツ子の宗教というのが、この浄土宗でありまして、その浄土宗の教學院が創立されてから、今年でちょうど十五周年を迎えました。これは、こういうことを主張しているもので御座居ます。私共が、良いことをなしたあとは、それが損であつても気持ちがよくしいが、泥棒をしたあとは儲かつたけれども、気持ちが悪いものであらうと思われます。ところが、良いことをしようとする仲間、おのれの心の中に敵があつていいことが出来ない、これは確かなことだろ

うと思う。皆様もいいと解りつつ、なさらないことが、沢山あらうと思いますが、そのようなときに、私共は、南無阿弥陀仏と称えるのです。そして、勇気をつけていただいて、損であつても、おのれの心の大部分がなしたいと思つておつても、良いことをするようにつとめて居ります。その南無阿弥陀仏と称えることをおすすめになられたのは、法然上人で御座居ます。その法然上人は、吉川英治さんの新平家物語にもでてくる、かの平清盛より十三才年下のお方であり、源頼朝から十五才年上のお方で御座居まして、亡くなられましたのは、源実朝の時代で御座居ます。そのような時代にこのようなことを教えていただき、私共は、その法然上人の精神をどうかして、皆様にお伝えして、皆様にも、ひとつ苦しいであらうが良いことをしていただきたいと思うので御座居ます。

体 験

森
赫
子



今日は相憎く雨が降っておりますね。でも春雨ですね。私はこの頃大抵、家のなかばかりに引込んでいるものですから、久振りで外に出てまいりましたら、すっかりスートいい気持ちになって、ぽうっとしてしまいました。もう、すっかり春めいてきて、折角、今日お話ししようと思っていたことも、それですっかり忘れてしまいました。

私は、すっかり目が見えなくなりましたから、三年と少々になります。初めの頃は、講演などに頼まれても、一生懸命になってお話したもののなんです。最初に見えなくなったら、講演を頼まれましたのは、中央大学の学生さんが、五六人おみえになりました、大学の記念祭があるから、講演をお願いしたいとおっしゃるのです。私はいままで、講演など一度もしたことはありませんし、それに、舞台でのセリフとい

こんにちは、森 赫子でございます。

○

うものは、沢山しやべるときでも、セリフ書きができていて、それを覚えてからお話するのですけれど、セリフ書きもできていなくて、一時間もお話するなんてとても出来ませんから、と申し上げたんです。そうしたら、でも、これから生活をきりかえて、どんなことにでも勇気をもってやって行かなければならないんだから、なさった方が、いいんじゃないですか。こういうチャンスに、勇気を出してなさることが大切ですよ。とおっしゃって、仲々おすすめるのがお上手なんです。それで、仕方なく、つかうかと出かけて行きました。

そういうとき、私の肩書きというのが面倒くさくて、いつもまごまごしてしまふんです。元女優なんてよく言われるんですけど、元女優という職業はありませんね。税務所に呼ばれて、「あなたの職業は……」と聞かれましたときも、元女優という職業もないし、といって何も未だ仕事をしていないのに、えらそうに著述家だの、作家だのといえば、本職の人に叱られそうですから、「まあ、無職にしておいて下さい」と申し上げましたら、「無職で税金を払うなんてことはないんだから、何にか職業をお決めなさい」と言われました。なかなか税務所の方はおかたいですからね。私も困ってしま

って、仕方がありませんから、「何んでもよろしいようにおつけ下さい」と申し上げたんです。これは余談ですけれど。そこで、中央大学に参りましたときも、はじめての講演ですし、皆様方がこちらを見ていらっしゃるのが一目で分かっってしまったら、随分あがってしまっただろうと思うんですけど、見えないということは、そういうとき大変都合がよくて、どんな顔していらっしゃるか分らないけれど、とに角、カボチャが並んでいると思っていればいいんだ……どうも失礼、今のは取り消しにいたします。その点、大変気が楽くで有りがたいと思ったわけです。それで、その時の題名が、「若き世代の自由と恋愛について」という大変むずかしい題なんです。でも、私は一生懸命いろんなことを考えて申し上げます。

私が見えなくなったという一つの現実だけで、舞台には出られなくなるし、永年やっていた仕事は出来ない。そして、それに連れて、特殊の社会ですから、生活の保障とか、将来の保障は何もないわけで、そういうものにも切り離される。生活も出来ない、仕事も出来ない。何もかも切り離されてしまつて、それでもう狭いところえ追いやられたときに、そうかといって、自分で働こうと思つても急に見えなくなつちやつたんだから、どう動いていいんだか見当もつかない。そう

いう窮地に追いやられたときに、実際にそういう場であって、何を一番感じたかという、一番不自由なときに、何んて自由になったんだろうと思ったんです。それは、今まで縛られていた色々なことが、皆んななくなってしまう、切り離されてしまつて、自分自身のことは、もう死のうと生きようと、自分が何を考えようと、何をしようと、全部自分の自由で、時間も何もかも自分の自由に使える、何をしても構わない、自分のことは自分でやれる、責任が全部自分にかかっているんだ、自由なんだ、と思ったとき、本当にのびのびとしたのです。

このようなお話を一生懸命になつてしたわけです。それからのちも、時々講演などに頼まれますときも、一生懸命になつてお話をしたわけです。

ところが近頃になつて感じますことは、私がどんなに一生懸命になつておしやべりしてみても、結局私のせまい人生の中から、しかも、見えない世界の中から眺めて、感じて、申しあげているだけの話で、人々によつてみんな条件や環境が違ふということ、お見えになつてゐる皆様方にしましても、夫々の立場々々によつて環境とか条件が異なると思ふんです。例えば、私自身は、そういう場に追いやられたから仕方なく生きていくために、将来に向つて何か自分の出来そうな

ことを選んで、一生懸命やっているわけです、ところがそうではなく、私と同じように、やっぱり見えなくなつたお嬢さんが居られました、その方は、御両親も揃つて居られるし、財産もお有りになるし、不自由なく一生何の苦勞もないわけです。ですから、皆様がお見えになつてもお会いにならず、大抵お父さまかお母さまがお会いになつてゐる。そして、御自分はお部屋の中でラヂオを聞いたり、自分のしたいことをなさつてゐるわけです。

そういう生き方と、私の生き方と、どちらがいいかという事は、大變むづかしくて分らないし、善い悪いは言えないと思うんです。もし、私がそういう立場にあつたとしたら、多分よく分らないけれど、そんなに何もしなくていいんだつたら、自分の好きなことをしてゐた方がいいですもの、好き勝手に自由に振るまつてゐると思ひます。

ですから、その立場々々によつて、道を選ぶにもその自分のもつてゐる条件の中から、出来そうなことを選ぶ、だから、同じ見えなくなつても、生きてゆこうとする道がみんな違ふわけです。そのような、お持ちになつてゐる環境とか条件とか、自分の肉体の条件とか、色々なものの中から考へて居られるんですから、それを自分一人の考へや、判断でもつて何かを一生懸命になつて、言い過ぎるとおかしいんじゃない

いか、という疑問ができてしまうんです。

○

前置きが随分長くなってしまいましたけれど、つまり、私が見えていた時分と、見えなくなってからと、比べてみますと、実際の生活の面では、大変に変わってきたわけですね。もう、本当に生れ変わった程に違う世界に向って生きはじめていくわけですね。それと同時に、考え方とか、ものの見方というところが、大変違ってきてしまったのです。その違いをつぐらいつくくらいとりあげてお話ししてみますと、見えている時分には、神様とか、芸術とか、そういうものを大変立派なものと考えて、高い処へおいて、それに向ってどうかして、立派な人間になろう、立派な芸術家になろうと、一生懸命にやっていたわけですね。いくら一生懸命にやっても、ちよつとの躰ずきで俳優が舞台に出られなければ、いくら芸術家といつていばつたつて、実際問題としては何の価値もないわけですから、やっぱり何にもなくなつて、無になつてしまふ。ちよつとの躰ずきで何にもなくなつてしまふ。それを考えてみますと、私は、そういう考え方よりも、もつと現実をしっかりとみる事を忘れていたのではないか、そういうことを大変考えるようになりましました。

ですから、私が見なくなつたからといって、過去を振り返

つて、今まで見えていた時はあんなに良かったんだけれど、今でも見えていたらどんなにいいんだろう、と考えたところで役に立たないんだし、又、未来に向つて、いつか直るかもしれないといつて、直らないのに、直るかもしれない希望のために、毎日々々そのためにだけ生きるなんていうことは、つまらない話だと思ふんです。だから、現実は見えないんだから、その見えないという条件を、自分自身の現在の条件を素直に受けとつて、そこから生きていかなければならないんだ、そういう風に受け入れることにしたわけなんです。

例えば、人間の考え方なんかでも、今までは立派なものになれるとして、人間というものも立派に生きなければいけないと生きていたんですけれど、でもよくよく色々の現実をながめてみると、人間といつたつて、隣人を自分と同じように愛しましようといつた処で、自分の主人と同じように、隣の御主人を愛したら一寸工合が悪いですからね。それは冗談としても、とに角、牛や、豚や、にわとりなんか愛しましようといひながら、殺して食べてしまふのですから、牛や、豚やにわとりによれば、人間なんて心よく思つていないかも知れません。とにかく、世の中には、矛盾といひましようか、立派に生きようとしても、生きられない、人間自体、全部の世の中動きというものが、人間本位に、人間に都合のいいよ

うに動かしていつている、そういう矛盾とか、醜い姿というものはいっぱいあると思うんです。

ですから、そう立派なものだと思えないで、人間というものは孤独であるかもしれない、頼ろうと思っても頼るものも実際にはないかもしれない、自分が救われていると思っただけで、それは気持ちで思うだけでの話で、現実としては、やっぱり病気になるときはなるし、死ぬときは死ぬのですから、頼るものはない。頼るものも何もないという、そこが出発点となつて、そういう条件をいっぺんみんな受け入れて、その中から出来そうなことを、少しでもそういう世界から、善い、楽しい幸福に生きられる方法を段々に考えながら、歩んでいったらどうかと思うんです。そういう風に考えが大変切り変つてきたわけです。

例えば私はこの頃、ラジオをよく家で聞いているわけですから、すると、広島の前爆の傷をうけられた方々だとか、黒人の子供の日本に置いていかれた人達のドラマなんか沢山ありますね。そのドラマの一つですが、お聞きになった方もあるかもしれないんですけど、これは、ミュジカルですから、軽く楽しくという意図のもとに作られていますから、作品をどうこうというわけではないんですけれど、その筋は、若い夫婦が、お風呂屋さんについて、自分の可愛い赤ちゃん

を、黒人の子供ととりかえられてしまふんです。それで、どうしようもなく、その奥さんは交通事故で死んでしまい、御主人の方だけが、その黒人の子供を一生懸命に育てるわけです。それが段々大きくなって、学校へ行くようになって来ると、囲りの人にいぢめられてきたり、娘さんなものですから色々な思いを年頃になるにつれて、苦しみや悲しみが多くなつてきて、磨いたなら、洗ったなら白くなりやしないかと思つて、ゴシゴシ洗ったりするけれど一向に白くならない。そして、段々追いつめられていつて、どうにもならなくなる。これから、将来結婚しようとしても出来ないかもしれない。働こうとしても使ってくれるところはないかもしれない。そういうどうにもならないところに追い込まれて、そのお父さまは、神様に一生懸命おねがいをするんです。「どうぞ、私は黒くなくてもいいから、娘は、これからなんだから白くしてやって下さい」と。神様はききとげて下さつて、娘は白くなつて、お父さまは黒くなくなつてしまふんです。

そういうドラマなんですけれど、これは、日本人の考えとしては、大変いいようで、窮地にあるときに、何か神を頼む奇蹟を信ずる、何か救いがありはしないかというような気持ちをもちことは沢山あると思うんです。でも、私は、もし黒人の子供がそのドラマを聞いたとしたら、矢張り、からかわれ

たような気持がして、そう大して救いにはならないと思うんです。それよりも、現実はどうにもならない、黒くて笑われるんだ、でも、笑われて、黒いということを一ぺん受けとって、それが自分の条件なんだから、それをうけとって、どういう風にすれば、いぢめられる中で、どうされても平気で生きぬいていくことが出来るか、ということを考えて方が、いような気がするのです。そういう実際の場合には、そのよ
うな事が、生活の何んでもない所にあるような気がするので
す。

○

こんな経験もございました。私が見えなくなってから、あの
る会合に呼ばれました。それは、大変立派な会で、一寸お話し
しすることになっていたのですけれど、その前に皆御一緒
お食事を頂いたんです。外国の方たの、社長さんだのと立派
な方ばかりいらっしゃるんです。私もそこで気取って澄し
ていたのですけれど、お食事をボーイさんが、サーと運んで
みんなでたわけなんです。皆さんホークやナイフの音をたて
ながら、食べはじめました。私は自分の家に居りますときに
は、何があるかということが分っていますから、平気で食べ
られるのですけれど、その時にはお皿の上には、一体何がど
こに盛られているのか、見当がつかないのです。そこで、食

べないでチートしている方がいいかしら、どうしようかと考
えました。食べようとして、もし、じやがいもでも、コロコロと、ころがってしまつて、失礼いたしましたというの
も恥しい話だと思い、大部躊躇いたしました。しかし、考え直して、もし、こういう時に食べなかったなら、これから先き、
こういう席には一切出ない事になるに違いない。もう、こ
ういう席に出席するのが億劫になるに違いない。少し位おかし
くても何んでもいいから、平気で食べてみたらどうだろう。
おなかも空いていますから……。

そこで、思案の末え、指の先きでお皿の上を、チヨンチヨ
ンとつついてみたのです。そしたら直ぐ分かつたんです。
これは鳥、これは野菜がこういう風に並んでいると分りました
ので、これなら大丈夫だと思つて、私もホークとナイフを
とつたのです。ところが、鳥は骨がついていて、とても食べ
にくくて、普通でも滑つてしまうのです。又、ころがしても
おかしいと思い、ちよつと摘んでかじつちやつたんです。大
変上手に食べられたので、皆んな手でもつて食べちゃつて、
隣りに並んでいる野菜も、つまんで食べちゃつたんです。そ
して、ふと気がつくと、皆様がそばで話をしながら、召し上
つていた方の声が、一寸とだえているのです。きつと見えな
いのになんな食べ方をするかと思つて、幾分の興味をもつ

て、みな見ていらっしやる所へ、手でつまんで食べているんですから、おかしいのを我慢しながら、皆様見ていらっしやるに違いないと思った途端に、今までなら、手をそつと引込めて下を向いてしまう処なんですけれど、思い切って上を向いて笑ってしまったのです。そして、「お行儀の悪いことをして失礼いたしました。この方が便利だったもんですから、一寸摘んで食べてしまったのです。失礼申しあげました。」と言ったんです。すると、皆さんが笑いながら、「飛んでもない、鳥というのは、本式の作法では、手で食べるもので、決して不作法ではありません。むしろ当り前ですよ。皆さんも手で食べた方がいいですよ」と大変庇って下さって、私も、あたりの方も、和やかに、その場がすんだわけです。

もし、あの時に、恥しい気持ちで下を向いてしまったら、皆様だって可愛いそうな気持ちでだまってしまって、私自身も、こんな恥しい思いをするなら、一切こういう席へ出ることは止そうという悲愴な決心をしたかもしれません。だから一寸したほんとなつまらないような場で、少しでも気持ちをほぐして方法を考えていくことが、案外なんでもなく、苦しいこともよけながら、生きてゆけるのではないか、という気持ちができるわけです。

○

こんな話も御座居ました。女子高校の生徒さんで、身体障害者で、小児マヒで手が一寸きかなくて、物を喋べるたびに首を振ってしまうのです。ちょっと見たところでは分らないものですから、健康の方々のクラスで勉強なさっていたわけです。そして、囲りの方がみんな年頃の娘さんですから、大変庇って下さって、その方の少しでも髪が乱れていると、解してあげたり、一々世話をやいて親切にしてあげるのは、その娘さんも、大人しく黙まってされるままにやっているわけです。そして、ある日その娘さんが、本を読まされたのですけれど、首を振り振りやるものですから、その様子が大変おかしかったので、先生が笑っちゃったんです。生徒さんたちは、馴れているから笑わないのに、先生が笑ってしまった。そしてその娘さんは、だまって椅子に掛けちゃったのです。そのとき、皆んな囲りの人達が憤慨してしまつた。先生がかえってしまわれてからも、生徒さん達はおさまらない。そこで、隣りに席をしている生徒さんが、代表で教員室に抗議を申込んでいったのです「先生は、あんな悲しい、さびしい思いをさせて思いやりがないと思います。そういう事は、先生自身が氣をつけて下さらなけりやならないのに、先生が笑うというのは、どういうわけですか。」すると先生が、「みんなは、あの娘の読む様子をみていておかしくないのか」と

「そういう親切が、果して本当の親切になるかどうか、よく考えてみた方がいいんじゃないか。皆な、余りにも親切に庇い過ぎやしないか。たとえば、これから、卒業して社会へ出て、そういう体をもって実社会へ出ていくときに、お家の方々位らいは、庇うかもしれないけれど、外に出たときは、誰が庇ってくれるのか。みんな矢張り、おかしければ笑うし、もつともつと苦しい色々の思いをしなければならぬ。そのとき、笑われるぐらいでどうにもならなかったら、仕方がない。それよりも、おかしかったなら自由に勝手に笑った方がいい、はじめはいやかも知れないが、それで段々習らされてしまう。平気になっていく。笑われることが当然のようになってしまう。これでも尚、苦勞は多いんだから、その方がいいと思う。」と先生は諄々と仰言ったのです。それから四、五日立って、その不自由な娘さんが、一寸したことで、とても癪癢を起して、囲りの人々に泣いて騒いでおこったらしい。大したことではないらしいのですけれど、つまり、「私のことをオモチャにしないで頂戴、私だって同じ人間なんだから」といって大變おこった。それで仕方なくて先生を呼んできたら、先生が

このお話で、昔だったら、親切になさい、といった教えたのでしようし、また、唯親切にすればいいと思ったのでしょうけれど、この頃は、矢張り、親切というものは、改めて、不親切になりやしないか、という疑問をもって眺めて、そして、考え直してみる。人間というものは、本当に立派なものか、どうか、もう一度疑いをもって考え直してみる。そういう事が大変大事になってきたのではないでしようか。

その方が、確かに現代的な解釈だと思ふのです。

大変まとまりのないお話を申し上げましたが、又機会がありましたら、お目にかかせていただきます。

諸行無常のはなし

武 田 泰 淳

○

私は、武田泰淳と申します。泰淳という名前でお分りのように、坊さんの出身であります。現在でも、まだ浄土宗から破門されて居りませんから、自分では坊さんのつもりで居ります。僕の父親は、大島泰信と申しまして、浄土宗の坊さんでありました。この父親の方は、非常に真面目で、最後までお坊さんとして一生を終った人ですが、私の方は、途中で小説を書く方へ踏みはずしましたが、しかし、私は現在でも、我々の日常生活が、すべて仏教の哲理によって、とり囲まれている。我々が、生きていること、そのものが、仏教の証であるという風に考えて居ります。

仏教は、非常に沢山お寺がありまして、立派なお坊さんが、毎日のようにお説教をなさって居りますが、割合に、最近の若い人達、いや、若い人達ばかりでなくて、僕等の同職業の、ものを書く連中でも理解していない。理解していないと云いますか、深い関心を示さない人が多い。私自身も、増上寺で加行を致しましたが、自分も仏教の学問をして居るという風には感じません。感じませんが、しかし、仏教というものは、こういうものであるか、ということ仲間連中に聞かれましたときには、唯一つだけは言えることがある。それは、諸行無常という言葉であります。これは、いかに僕が無知であっても、どういう意味であるかという事は、よ

く解るのであります。私は、これを現代風に云い換えれば、

「すべてのものは、変化する」という教えであると思いま

す。すべてのものは変化するという事は、誰れでもよく分っ

ているのでありますが、いざ我が

身のことになってみると、なかな

か年中考えている事は出来ませ

ん。たとえば、私が、小説を書い

ていて、その小説が、絶対に良い

作品であるとして置きたく思っ

ても、その評価はいつ変わるか分ら

い。又、もしもこの銀座という町

が、普通の町であつたならば、

この現在の銀座という立派な町は

生れなかつたのであります。

諸行無常と申しますと、春は花

が咲いて、大変にぎやかであるけれども、やがて、はげしい

夏の日光があたつてきて、秋になると、草木の葉がばらばら

と落ちて、雨が降って淋しくなつて、やがて木が枯れてしま

う。そういう風に、非常に淋しい、悲しい、諦めあきらの哲学と

して、一般に今までは、受けとられて居りましたが、私は、

諸行無常というものは、決して、そのような、淋しい、狭く

るしい、これきりで終つてしまふという諦めあきらの哲学ではない

と思うのであります。



これは、鈴木大拙先生とお

話した時に、諸行無常という

ものは、実にいいものであ

る。現在の原子物理学や、或

は、医学、生物学すべては、

諸行無常を研究している学問

ではないであろうか。と申し

あげますと、ほかの点は、あ

の大先生は、僕の意見に全部

反対なさいましたけれども、

この点だけは、大いによろし

い、といつてほめて下さつた

のであります。ですから、諸行無常が、大いに今後活用され

て然るべきであるということについては、大体、間違いがな

いだろうという風に思います。

○

しかし、大体、言葉というものは、こわばり易いものであ

りまして、なかなかこれを、うまく活用することは出来ない。私などは、諸行無常を活用しすぎて、いささか、悪用しているような状態になって居りますけれども、実際は、もつともつと、言葉は広く解釈されて、ひろく弘められていいものであります。

言葉は、いかに難かしいかという事は、使っている人々は、それで立派に自分の心が、向うに通じていると思うんであります。なかなかそれは、こちらの心というものは、相手には分らない。その間に言葉という壁がありまして、なかなか、向うに通じないのであります。その証拠には、現在一番流行している言葉に、「愛する」という言葉があります。ことに女の人はこの言葉が好きであります。しかも男に愛されるといふ事は、非常に彼女達は欲している。又、男性も、自分が愛しているという事によって、自分の男性であるという言力を実証するのであります。しかし、その愛するといふ言葉の中に、どういう意味が含まれているかという事を、彼女は彼女に、なかなかうまく言い聞かせてやる事が出来ない。非常にあっさりして、物わりのいい女性は、「ああ愛しているよ」と言えば、それで満足して呉れるのであります。もし、あなた方の奥様、旦那様が会話をなさったと仮定して御

覧になるとよろしい。

「あなたは、私を世界中で一番愛して居りますか。」そういう風に女の人に聞かれたときに、旦那様や恋人は、少しためらうのであります。決して、それは愛していないのではない。ただ、世界中で一番かどうか、その時に何とも言われぬ胸苦しさを感じるのであります。それは決して、愛していないのではない。そこで「一番愛して居ります」と、世界をとって答えたとする。そうしますと、それで満足する方はよろしいが、では、私をあなたは、五十万円位愛しているか、百万円位愛しているか、という風に再び尋ねられたとする。その時旦那様は「はい、五十万円愛している。はい、百万円愛しています」という事も出来ます。それは、正直であるか、どうかは分らない。果して、五十万円と答えたのは、正直であるか、どうかは分らないが、とりあえず、私はあなたを五十万円愛している。又、それでも満足しないで、「では、それでは、あなたは、私を皇后陛下よりも、エリザベス・テラーよりももつと愛していますか」と言われた時に、何んとも一体答えたらいいか。だんだん恥かしさと、ためらいで男性は苦しめられて来る。

ですから、我々日本人は何時までも、仏教の泉に身を浸し

ているのでありますが、もし、知り合いの人から、「あなたは仏教を愛しているか」と聞かれたときに、恥しさがあってなかなかうまく答えられない。愛している事は、間違いないのでありますが、では仏教を五十万円愛して居るか、百万円愛して居るか、エリザベス・テラーよりも、皇后陛下よりも愛しているか」という答のなかに、うまく云えない。つまり、我々は仏教に対する愛情を、まだうまく現代的に表現する言葉をもっていない。しかし、表現する言葉を持っていないからと言って、彼等の中に愛情がないであろうか。僕は有ると思います。無いはずはない。何故ならば、諸行無常に我々の全身は浸されているのでありますから。そのことが、頭の中に一瞬でもひらめいた時、彼と彼女は仏教的瞬間に出会っているのであります。

私は、何故諸行無常がいいかと言いますと、諸行無常だけが、人間の心を深くする事が出来る。もしも、絶対不変の定理、或いは、絶対不変の現実があったとしたならば、我々の心は、決して深くはなりません。たとえば、石炭というものがあります、ある石炭が山の中に埋っている儘では、決してガスになる事は出来ない。掘り出して、それを火の中に投じた時に、もし石炭が燃えて、外かのものに変らなかった

ならば、あれだけのエネルギーでは、我々を温ためてくれる事は出来ないはずです。そればかりではなくて、我々が生れたときからの同じ考えをもって、死ぬまで終ってしまつたならば、我々は、人間をお互に理解する事は出来ないのであります。我々の考えが変る瞬間にこそ、我々は、お互に人間同志であるという事が分るのであります。

○

たとえば、私は九州の炭坑に行ったことがありますが、その炭坑の穴の中に入ったのでありますけれど、その時、私はまだ炭坑夫というものを知らなかったのであります。もし、私が用もないのに、そういう穴の中に入っていった見物なんかをしたならば、きつと石炭を掘っている連中は、荒々しい乱棒者に違いないから、いい気持ちはしない。いい気持ちはしないどころか、石炭ガラ位い打付けられるだろうと思う。そういう風に覚悟して入っていったのであります。そうしますと、人車という車で斜めになっている坑道を滑っていくのであります、それを下りますと、後とは歩いて行かなければならん。鉄胃を被せられるのであります、私は、最初はこんな鉄胃なんか、なくたって何でもないと思って居りましたが、あの鉄胃がないと、我々素人は、ものすごく頭が痛

い。非常に頭を打付けるのであります。ところが、鉾山の人
は打つけないで、どんどん歩いて行く。あの炭坑の坑道の中
には、上の方には電線の通ったケーブルが通って居ります。

下の方には、石炭を運び出すレールが通って居ます。その専
問家達は、左の目で電流ケーブルを眺めて、右の目でレール
を眺めて歩いて行くのであります。ですから、炭坑夫の人々
の大半は、体が斜めになっております。私は、そうになってお
りませんから、非常に打つかって歩いていったのでありま
す。所が、キリハと言いまして、石炭の山を掘り出す最先端
のところは、一番難かしいのであります。そこでは、もう
殆ど真暗で水だらけであります。上からも水が降って来る
し、下も水だらけであります。ですが、決して彼等は掛声を
かけてはいない。つまり掛声をかけると、息が苦しくなりま
すから、静かに静かに、実に我々文士達が喋べるよりも、ず
つと静かに、殆ど居るか、居ないか分らないようにして、労
働して居ります。

それから、ちよつと下の方を見ると、真暗闇の中で、お弁
当を食べている。そのお弁当を食べている炭坑夫達は、決し
てお互に喋り合ったりしない。唯、黙って、もくもくとし
て、目に見えないようなお弁当を食べているのであります。

我々の方が笑ったり、叫んだりして非常に騒しいのでありま
すが、実際に働いている人は、実に静かだ。私が、今まで持
っていた炭坑夫に対する考え方、炭坑夫というのは、乱棒者
で、酒ばかり飲んであばれ者であるというのが、はじめて其
処へ入って分った。

こういう事は、実際に行ってみなければ分りませんが、し
かし、行ってみて考え方が、変るといふ瞬間に、私ははじめ
て、人間的に炭坑夫と結びつく事が出来るわけです。

それは、私は、頭を剃った経験がありますが、頭を剃った
心の中、或は苦しみというものは、頭を剃らない人には、仲
々分らない。これは幾く説明しても、一回頭を剃った事の
ある人と、頭を剃った事のない人の間には、仲々うまく道が
通じないというのは、頭を剃るといふ事は、これは女の方に
はすすめられませんけれども、兎も角、床屋さんへ行って剃
刀で頭を剃ってもらうわけです。今は、頭を剃る人は殆んど
いませんから、非常に日本剃刀かなんか研いで剃ってくれ
る。

私は、加行にいく前に剃りましたのですが、剃りますと顔
の方からなぜていって、頭のところも顔になっていって、ず
つと同じになってしまふ。顔も、頭も同じ人間がそこに出来

上った。それは、解り次第に非常に緊張します。「ああ、俺もいよいよこれは変った人種になってしまった。最早、並々の人間ではなくなってしまった。最早、ビフテキも食べられないし、恋愛も出来そうもない」そういう風なさびしい気持ちになります、実際に、それはそうではない。そうではないという事は、明らかであります、つまり、その時に一瞬非常な緊張を感じます。

僕は、親のいう事をちつとも聞かないような、悪少年でありましたが、矢張り、頭を剃り下した瞬間に、はじめて仏教の専門家、或いはお坊さんの苦しみというものが解るのであります。それでは、その全部の人が、頭を剃ってもらわなければ、坊さんの苦しみが解らないのかという風に云われますが、今はその必要がありませんから、どうぞ御安心下さい。

○

我々の仏教そのものが、諸行無常を説きながら、変って行く。これは、恐しい勢いで変って行きます。というのは、自然科学の発達か、色々な不思議な、大きなもの、小さなもの世界へ入り込んで行く。その世界へ入り込んで行く発見が、もし釈尊が、前以て説き明かしていてくれなかったならば、仏教は偽りである。しかし、私は、現在の自然科学の最

先端の人々が、究明して次第に発見しつつある事実のすべてが、釈尊のお説きになった、言葉の中に含まれている。そればかりでなくて、世界の現在の状勢、非常に息苦しい状態も、すべて釈尊がお説きになった、諸行無常の原理の中に含まれていると思います。

本日は、浄土宗のお集りであって、法然上人を教祖とする宗団の集いでありますけれども、法然上人については、私のあとに、別に佐藤賢順先生のお話が御座居ますが、私は、あの人の中で、一番好きなのは、あの人がお父さんを殺されながら、お父さんの仇を打たなかった。その当時の武士道精神から云えば、もし一端親なり、兄弟なり殺されたならば、必ず復讐しなければ、正しい人間とは言われなかったはずであります。

何故、法然上人は仇を打たなかったのか。彼れは、勇気がなかったのか、怠け者だったのか、だらしがなかったのか、正義を逃げようとしたのか、私は、そうは思わない。彼れは勇気があり、正義を護ったのであります。それ迄の武士道精神から言え、絶対に許るされなかったことに真理を認めた。たとえ殺されても、もし、その敵きを打つたならば、新しい敵きうちが、次に発生する。その敵き打ちのつぎに、又

次の敵き打ちが発生するというので、彼等は、絶対に血なまぐさい斗争は止めないであろう。という事が、法然上人の大慈大悲の出発点でありました。もし、その時、その当時の強^{こゝろ}ばった武士道精神によって、若き法然上人が、敵き打ちをしてしまったならば、現在の浄土宗は存在出来なかった。

恐らく、それは、非常にはづかしめをうけたかも知れない。敵き打ちをしなかった卑怯者、と罵られたかもしれないけれども、しかし、上人はあくまで、その考えをお捨てにならなかった。

もしも、フルシチヨフや、アイゼンハウワーが、話が大きくなりましてけれども、法然上人のような気持ちになつてくれたなら、どうだろうか。これは、浄土宗の偉い坊さんが出掛けていって、フルシチヨフなり、アイゼンハウワーに、南無阿弥陀仏をよく聞かせたらいいと思うのですけれども、向うは聞いてくれないかもしれないけれども、しかし、兎も角、法然上人くらい徹底した、無抵抗の抵抗、その当時の道義的考えだけでなくて、真に衆生のために、救いを求めるという考えが、フルシチヨフや、アイゼンハウワーの心の中に、少しでも芽生えてくれれば、今よりは、もつと血なまぐさい予感がしないで済むのではないか、そういう風にも、私

は考えます。

○

諸行無常が、人間の心を深くする、という例を一つあげますと、これは、葉山嘉樹という労働者作家があります。もう死んでしまいましたが、これは、船員になったり、或は、飯場の人足土方になって、働いていた人ですが、その人の作品の中に、「セメント樽の中の手紙」という作品があります。これは、非常に短いものですが、それは、どういふ事を書いていたかと云うと、これは、セメント工場につとめている職工さんと、女工さんの二人の、恋の物語であります。

そのセメント工は、働いているうちに、石を砕く機械の中に、巻き込まれてしまった。石を砕く機械は、非常に大きいのですから、職工さんの体も、粉々に砕けてしまったばかりでなくて、セメントになつてしまったのであります。諸行無常の中でも、セメントになるのは、余程ひどい方の諸行無常であります。そして、粉々になつて見分けがつかない。もつとも、肉も^{たましい}霊までが、と書いてありますが。霊まで粉々になつて、セメントになつてしまった。今まで、愛していた若い男性が、セメントになつてしまったのでありますから、非常に

悲しい。悲しくてセメントの袋を縫っているわけでありま
す。粉々になってしまいましたから、棺の中に入れるわけに
もいかないので、セメント袋の中に入れるより仕方がない。
それで、セメント袋を縫いながら、手紙を書いている。その
手紙が、その短編になっているのでありますが、その中で、
その可愛いそうな女工さんは、どういう事を言っているか。
どういう事を人々に訴えようとしているのか。

それは、まづこのセメントを、どうぞ大切に使って下さ
い。はじめは、彼女はこのセメントを劇場や、大広間などに
使ってもらいたくはない、贅沢な施設に使ってもらいたくな
い、と言っているのですが、そのうちに、いや、そう
ではない、どうぞ、自由に、何にでもお使い下さい。あの人
は、生きている間は、非常に立派な若い青年でありましたか
ら、きつとセメントになっても、立派に皆様方のお役に立つ
でしょう。どうか、皆様はそのセメントを、何処にお使いに
なったか、それを、この可愛そうな女工さんにお知らせ下さ
い。

そういう風に、彼女は書いていたのであります。その場合
には、彼女が、恋人を失った悲しみ、或は彼女が、非常に勞
働者の妻となろうとしたのに、なれなかった怒りのようなも

のがあるのでありますが、その瞬間に、彼女は、その大きな
諸行無常——自分の一番大切なものが、セメントになってし
まった、そういう現実の中から、実に深い深い心をもって、そ
の手紙を通じて、我々に訴えてくる。だから、我々は、我々の
死を実に嫌がります。それは当然でありまして、私たちも、
果して死ぬ時になって、南無阿弥陀仏といって、死ねるかど
うか、これは甚だ疑問であります。おそらく、私などは、ジ
タバタして何とか生きようと思って、見苦しい振舞いをする
だろうと思いますが、しかし、我々が、そういう死をもって
いる。平等にそういう死をもっている事が、私たちを結びつ
ける。もし、彼奴だけは死なないという人間が出て来たなら
ば、その人と、私たちの間にかける橋はなくなってしまいうだ
ろう。

○

まだ少し時間がありますので、もう少し、諸行無常をおし
展げますと、幽霊というものが御座居ます。幽霊というもの
は御座居ますと言っても、これは本当にあるか、どうかは解
らないが、しかし、芸術的には幽霊というものは存在しま
す。又、猫化けというものもあります。これも、ありますと
いっても見た人はいないのでありますが、この幽霊というよう

なものも、人間の変化の諸相を現わしているのであります。

泉鏡花の小説の中に、「白鷺」というのがあります。これは、映画にもなって、確か山本富士子が、美しい芸者になってやったと思いますが、これは、ある若くて、きれいな芸者さん、芸者はその当時は、今のように自由平等ではありませんでしたから、その当時の芸者というのは、不自由な生活をしていたらしいので、それが、無理にお客をとらせられる。ところが、その若い芸者には、本当の恋人があつて、恋人は画家であります。ところが、この画家は、金と力がない男で美男子ではあるが、彼女をうまく妻君にしてやる事が出来ない。その間に、悪大臣が彼女を妻君にしてやろうと思つて、色々策をめぐらす。とうとう閉ぢ込められてしまつて、白鷺のような美しい芸者さんは、身体谷まつてしまふ。それまでは、悪大臣というのは、非常に力が強い。力が強くて、芸者も画家も絶対に抵抗する事が出来ない。

ところが、その芸者さんは、いよいよ仕方がなくなつて、^{かんざし}簪で喉を突いて死んでしまふ。死んでしまふと、彼女は幽霊になるのでありますが、その幽霊になつた途端に、今まで、あれ程か弱つた、男性の暴力に抵抗する事が出事なかつた女性が、忽ちゴジラのような力を發揮して、その悪大臣の

上に、雷を落下させるのであります。

これは、実に悲しい悲しい物語でありまして、実際に現在のような世の中であつたならば、幽霊にまでなつて、復讐する必要がなかつたのでありますが、その作家の泉鏡花も、或いは幽霊を信じていなかった、信じていなかったけれども、その作家は、余りにもその芸者が可愛いそうだ。もしここに、幽霊という変化が許るされるならば、その変化によつて、彼女の可愛いそうな心に、せめてもの慰めを与えて遣りたかつた。つまり、彼女に殊更に、諸行無常の悲しみでなくて、諸行無常の喜びを与えるためには、人間が変化し得るといふ原動力を、泉鏡花さんはその白鷺のような、美しい娘さんに与えたのであります。

我々は、實際、人間と人間の結びつけるのが、難しいといふ事をよく知つて居ります。檜山節考といふ小説をお読みになつても、あのお婆さんの気持ちと、娘さん或いは息子さんの間に、どうしてもギヤツプがある。一番親しい肉身同志の間でも、仲々出来ないであります。ところが、あの村の習慣によつて、親を捨てにいくということ、これは今では、絶対にあり得ない事であつて、人情の許し難いことでもあります。が、しかし、もしそういう状態があつたとして、その瞬間に

あの捨てにいくお婆さんと、背負た息子の中におこった心、その心が、真に人間と人間を結びつけるのであります。

あの時には、おりん婆さんは、決して死にたくない、死にたくないとは言わなかったのであり、非常に素直に山に行ったのであります。もう一人のたけやんというお爺さんの方は、死にたくないえ、死にたくないえと云って、とうとう谷底に落されてしまった。これは両方とも、現在ありえないことでもあります。あの両方の考え方、お爺さんの考え方、お婆さんの考え方、お互に正反対であるが、この子供達が、あの瞬間に真剣に考えたこと、それが、はじめて人間と人間を結びつける事なのであります。

ですから、我々は苦しみも欲しくない、死ぬことも欲しくないが、しかし、苦しみや死があってくれる事が、果してそれ程、絶対的に悪い事であるかどうか、私はその時はじめて、生老病死という四の定理を利用して、人々を善き方へ導びいていったお釈迦様の気持ちが解る。もし、それを活用しないで、強ばっていった、こういうものが仏教の定理だといって、ちつともそれを活用しなかったならば、折角のお釈迦様の気持ちを、我々は発展させていく事が出来ません。

でありますから、決して我々は、仏教から無縁になる事は

ありえないという自信のもとに、人間と人間を結び合せるものとしての仏教を、殊に浄土宗を盛んにしていくことを、私は切に切に希望するものであります。

筆者略歴

佐藤 密雄

現在大正大学教授、同仏教学部長、浄土宗教学院主幹、法然上人鑽仰会代表、鎌倉大仏殿高德院住職、著書、「無量寿経講話」をはじめ經典翻譯等著多数あり。

森 赫子

元新派女優、昭和三十一年失明「浪花女」の舞台を最後に引退、著書、「女優」をあらわし、其の後評論生活に入る。

武田 泰淳

現在第一線の文学者、大島泰信師徒弟弟、浄土宗の僧籍にあり、中国文学を専攻、途中より作家生活に入る。著書、「森と湖のまつり」、「史記の世界」の近刊をはじめ、小説、文学書多数、

佐藤 賢順

大正大学教授、高崎経済大学講師、浄土宗教学院理事、法然上人鑽仰会幹事、著書「リッケルトの哲学」、「論理学」、「浄土教の本質」等、著書及び発表論文多数あり。

ひじり法然

佐藤賢順

○

法然上人のお書きになった著作は、実に沢山あります。選
撰本願念仏集であるとか、三部経釈であるとかという著名な
ものが、沢山ありますけれども、上人のお書になった、お残
しになったお手紙、所謂消息ですが、それはいま私の数えた
ところでは、大体二十通位は残っているのであります。

今日はそのお手紙の中の、一、二のお話を申し上げようと
思います。

手紙というものは、我々日常浮か浮かと書いて居りますけ
れども、実は、それがどうかすると、大変な事になるもの
で、七百年、八百年の現在に至る迄、法然上人のお書きにな
った手紙が残って居りまして、しかも、それが浄土宗の教義
を示す、非常に大切な文献として残っているというような事

になって居ります。

法然上人の残されたお手紙の中では、一枚起請文も、お手
紙にしますというところ、その外、黒田の聖人につかわされたお
手紙であるとか、大胡の太郎につかわされたお手紙であると
か、こういうようなものが名高い手紙となって居ます。いづ
れも、此れ等晩年のお手紙であります。

若い時代に書いたというお手紙は、大抵は残って居りませ
ん。この人が、どの位偉くなるんだか解らないから、手紙を
貰っても大事に仕舞って置きませんから、散失します。けれ
ども、晩年になって、名を成し人から崇められるようになる
というと、貰った手紙というものは、我々でもそうであります
が、大切に保存して、場合によっては表装して床間に懸ける、
額にするというような事もあるわけであります。

何れにしても、法然上人の晩年のお手紙が残っているわけでありすが、その中で、熊谷次郎直実に与えられた手紙というのが、現在二通あるのです。今日は、その熊谷次郎直実、その人に与えた手紙のお話を申しあげようと思うのであります。

御承知の通り、熊谷次郎直実は、鎌倉時代に於ける著名な武士でありまして、頼朝の御家人であつたのですが、ある人と領地の争いから、訴訟をおこしたところ、頼朝に非常に不利の判決を下されて、それを不服に思つて遂に出家をして、法然上人の庵室に入るに至たり、お弟子になつて名を改め、熊谷入道蓮生という事になつたわけでありすが、

長く京都に止まつて居りまして、郷里の埼玉県の熊谷の方に帰つたり、又京都に行つたりして居りましたけれども、その間に、法然上人に色々の自分の疑問を差し上げて、関東に戻つて来たときに、それに対してお答を願つたのですが、その御返事が、法然上人から蓮生の処へ来たわけでありすが、

熊谷次郎という人は、その当時非常に有名な武人でありまして、例の一の谷において敦盛を打ちとるとか、そういう数々の舞台芝居の材料になるような物語を残したのであります。が、一面また、直情径行の人で、法然上人の弟子になつて、念仏の信者になるといふと、ひたむきに念仏の修行に励んだ

ので、京都に居りますときには、一日に三万、五万の日課念仏を怠らなかつたと伝えて居ります。

それから又、京都から関東に帰りますときには、行住坐臥不背西万という教えをまもつて、逆に馬の背中に乗つて来たという話が残つて居ます。京都から関東に帰るのですから、どうしても、西の方に背中を向けなければならない。それじや阿弥陀様のいらっしゃる西方に、背中を向けるのは勿体ないというわけで、鞍を逆に置いて、逆に乗つて来た。人々は、皆それを笑つたけれども、平気で関東へ帰えられた、という話がある位直情の人でありました。

○



この熊谷は、体がいいし熱心な人でありますから、只念仏だけ申していたのでは、何か物足りない。これでいいのだろうか。ほかにもっと沢山修行をする必要があるのではなからうか、というような疑問をもったのであります。

これは、今でもそういうような人は、沢山ありまして、念仏だけでは何だか物足りないというので、彼方へ行って、坐禅をくんでみたり、此方へきて、戒律をまもってみたりする人が沢山ありまして、念仏だけでは、果して極楽往生できるかどうか、という疑問をもつ人が、現在でもあるわけであります。ですから、あちらの方の不動様を拝んだり、観音様に詣たり、色々とおちらこちら、願がけをするようになるのでありますけれど、これは皆な人間共通に持つ、宗教上の疑問であって、一人のお医者者を信頼しておればいいのでありますけれども、遂い信頼出来なくて、あちらこちらと、かけ廻るというようなことがあるわけであります。

熊谷次郎も、そういう疑問をもって、法然上人に念仏だけでいいんでしょうか、という手紙を出したのであると思うのです。それは、お答えの中にそういう事が書いてありますので、そう想像出来るわけであります。そのお手紙というのは、大変細やかな感情のあらわれているお手紙で、年は法然上人が六十才、熊谷が五十六才の時に入室したのであります

し、年も似ているわけですが、それに対して上人のお手紙が、こういう風に認めてあるのです。

「御文よろこびてうけたまわり候ぬ。まことに、そのちは、おぼつかなく候つるに、うれしくおほせられて候、よって、念仏の文かきてまいらせ候、御らん候べし」

こういう書き出しで、細かに色々のことを書いて居ります。今読みました通りに、お手紙を貰って嬉しく拝見しました。まことに其の後はどうして暮しているかと思つて、心にかけていたのに、達者ということで大変嬉しい。お尋ねがあったので、念仏のことを書いてお送りしますから、どうか読んで下さい、と大変丁寧なお手紙なのです。法然上人のお手紙というものは、ほかのお手紙を拝見しましても、最初こういう風に、非常に丁寧な言葉で、色々の弟子達の問いに答えているのです。たとえば、正如房という女のお弟子で、これは後白河法皇の第二女であると言われている方ですが、その人に与えた手紙などを見ましても、その細やかな愛情が溢れており、はじめにそのように丁寧に答えまして、教えのことになるわけです。

ところが、我々の手紙ですと、色々の要件を書きますけれども、法然上人のお手紙の中には、余り要件というものは書いてない、ほとんどないのです。全部が、はじめから終り

まで、法門のことばかりを談じて書いて居られます。その手紙の中には、あるものは、浄土教概説みたい、非常に了重な長い浄土教の要領を、全部書き残されたものもありますし、又、その中で、イエスカノーかを、はっきり答えて居られる。およそ、信者というものは、念仏だけでよろしいでしょうか、或は、念仏すれば極楽往生出来るでしょうかと、イエスカノーを聞いて来るのです。

本を書きます時には、そういう問題に対する答えというのは相当誤魔化して書ける。我々が、お互に論文を書くときには、そうであるようにも、ないようにも書くのです。余りはっきり書くと、突込まれると困る場合があるので、ボヤカして書く事が多いのでありますけれど、手紙はそうはゆかない。「明日何処々々へ来て呉れますか」というのに対して、「さあ、どうしましょうか、行きましょうか、行かずに置きましょうか」と云うわけにはいかないので、イエスカ、ノーをはっきり言わねばならない。ですから、法然上人のお手紙も、イエスカノーをはっきり書いて居られるわけです。

○
我々の言葉には、イエスカ、ノーの中間の言葉がありません。よくラチオのアナウサーの人が、色々の人を訪問したり、現地録音をやっている時に、人々に聞いて居りますが、

アナウサー達は、色々の人の説に対して、賛成すること、反対すること、出来ませんから、イエスもノーも云えないですから、その中間の言葉を使わなければならない。何と云う言葉を使っているかという「成程」というのを使っています。社会党の人に聞いて社会党が自民党の悪口をさんざん云っているのを聞いていると、そうですね、そうじゃない、とも云えないから、成程々々、といい、自民党の人に聞く時も、矢張り、成程々々と云っています。

我々は大抵、成程なんです。イエスとかノーの間の言葉を、しよっちゅう使っているのですけれども、この法然上人のお手紙にあらわれているのは、この成程がなくて、イエスカノーがはっきり答えられているわけであります。

そして、いま読んだ手紙の続きには、念仏の行とほかの行とを比較して、持戒とか、誦経とか、呪文を唱えるとか、理観といって念仏でなくて、心の中に極楽や仏様のお姿を観察する、そういうような行は、しなくてもいいのでしょうか、と熊谷直実が聞いたらしいのです。それに対して、

「そういう行は、仏の本願ではないから、極楽を願う人は、本願の行である念仏を唱えなければいけない。それでは、なければ、往生の望みはかなわない」と述べているのです。処が、熊谷の質問は、こういう理観

と併せて、親に孝行するという事は、念仏の行に、或は極楽往生の行になるか、どうかという事を聞きたかったらしい。というのは、八十何才かになる老母をかかえて居りまして、そして、熊谷は、実は法然上人のもとへ行きたくて仕方がない。もし早く法然上人のもとへ行っても別に差支えない、という御返事があったならば、法然上人のところへ早速出掛けて行きたい。こういう内容のことを云って、行ってもいいでしょうが、という問合せのお手紙を法然上人に差し上げたらしいのであります。それに対して、法然上人はつぎのように答えて居られるのであります。

「たえたらんにしたがひて、たもたせたもうべく候」

つまり、持戒とか、読誦というような行は仏の本願でないから、しなくてもいいんだ。もし、したければ、「たえたらんに従って、たもたせたもうべし」出来る程度のことを遣つてもよろしいという意味です。そしてそのつぎに、

「孝養の行も、仏の本願にあらず、たえんにしたがひてつとめさせおはしますべく候」

つまり、親に孝行するという事は、仏の本願でないのであるから、念仏に比べれば雑行であるから、「たえんにしたがひてつとめさすおはしますべく候」出来る程度のことを遣つて置きなさい、という御返事なのです。

これを拝見致しますと、法然上人という方は、実に非情な方で、人情がないというのではなくて、人情を超越している、非情の方であるという印象を直ちに受けるわけです。

○

よく人間法然と申しまして、この頃は人間法然の面を、法然上人の人間的な面を取り出して研究する傾向が強いのでありますけれども、無論、人間法然の面もありますけれど、しかし同時に又、こういう風に、人間的世俗的な関係を越え出でた、直々に如来と対決している「ひじり法然」の面がもつとも本質的な法然上人の横顔であつたように、想像するわけであります。

その点、この頃ヒューマニズムの盛んな時代でありますから、法然上人をただ人間法然と申しますが、しかし、法然上人の浄土教というものは、日本に於て最初に本当の人間の姿を把えた教えであります。人間の儚なさ、醜くさ、罪、孤独といったようなすがたを、本当に把握してそれにかなう教えを立てられたのであります。このお話は、森先生にもあつたし、武田先生などは、現代に於ける人間の真実性の把握という点では、第一線の最高の作家であられるので、法然上人の人間探求と相通ずるものを、無論、感じとって居られる事と思います。

そういうわけで、法然上人の浄土教の人間観は、それ以前の仏教が、かつて経験しなかった、本当の人間の眞実性というものを把握せられたのであります。そういう意味で、人間法然とか、法然の人間観とかというものは、要々皆なに云われているわけでありませうけれども、それは人間と人間とが対決している場合の道德である。親に孝行する、友達には親切をする、信用を重んずるということ、無論結構な事に違いないし、道德としましてはこういう事が要求されるわけでありませうけれども、その如来と対決する場合、人間と如来との話し合いとなる場合に、はるかに人間的な関係、倫理的な関係を越えて、ひじり法然の側面が、非常にはつきりと出て来ているわけです。そこが、このようなお手紙の文句となつて表れたのであらうと思うのです。

それでは、法然上人は、人間的な関係を捨てておしまひになつたのであらうか、というて決してそんな事はないのであります。今のお手紙の終りの所え以つていって、熊谷蓮生が早く、法然上人の処へ行きたいという、はやる心をおさえ、熊谷を慰さめてこう書いて居られるのであります。

「ただしこのなかに、孝養の行は、仏の本願の行にては候はねども、老母今年八十九才にておはしまし候なれば、相かまえて今年などをば、往生まちいらせ候べし、ただ一人

たのみにおはしまし候へば、孝養に念仏を心しづかにおつとめなされ、めでたく極楽浄土の往生をおまちなさるべく候。」と書かれて、本願の行ではないけれども、充分に親孝行をしてくれるよう、そして親孝行の代りに念仏を充分に唱えて、「老母今年八十九才にておはしまし候なれば、あいこまえて、今年などは往生まちいらせ候べし」今年などは往生なさる年だからまっていなさい、というわけです。京都などへは出て来ないで、もう直きに往生する年だから、み送つてから京都へ出て来なさいというのです。

「ただひとりたのみにおはしまし候へば……」お前ひとりを頼りにしているお母さんの事であるから、親孝行のために念仏を心静かになされて、めでたく極楽浄土の往生を遂げてしまわれてから、京都へ出てくるがいい、という大変親切な、細やかな気持ちをあらわされた手紙を差し出されているわけでありませう。

このほか、黒田の聖人につかはされた御文とか、その他、非常に切々として、ひじりとしての法然を、人間法然でなく、実存的人間の探求という面でなく、そういう面を貫いて、如来との対決をしている人間の姿というものを、えがいて居られます。

応現神

牧尾良海



隋朝の開皇年間のことである。澄空という僧侶があった。ようやく二十歳になったばかりであったが、晋陽の汾西という所へ高さ七十尺の鉄の大仏像を鑄造したてまつらんとした。

澄空は深く己れの責任を感じてひたすらに懺悔するとともに、ますますかねてからの誓願を堅固にして、今一度鑄造しようと決心した。それからというものの、懸命に力を尽し辛酸を重ねること又二十年間にして、材料や費用が再び揃った。そこで又、前の時の様に遠近に知らせた大勢の人々を集め、吉辰を卜して愈々鑄型へ鋳かしこんだ。ところが、鑄を開けて見ると、何としたことか今度も仏像は出来上っていなかったのである！

澄空は、天に向って哀号し、仏にすがって罪を謝しつつわれとわが身を責めさいなむのであった。彼は二度の失敗にも懲りることなく、今ひとたびを期して又々精勵刻苦の勸募を始めた。それから又二十年間の歳月が流れて、彼の精進努力の結実ともいふべき資材が再び集まる日がめぐって来たのである。

澄空は、そこで又近隣遠郷へ呼びかけて賢愚大衆を集め、吉日を卜って愈々鑄型を造り上げた。鋳鉄を流しこもうという段取りのまぎわになると、澄空は大きなその鑄のてっぺんの百尺もある高いところへ登って、声を張りあげて皆に言った。

「皆の衆！ 御挨拶を申し上げます。僕は、若い時分から大仏を鑄たてまつらんとした大誓願を立てておりました。今年にはや八十歳にもなりましたが、これまでにもう二度も大失敗をしておりますのじゃ。このたびも若し失敗いたしますれば、僕はもう今生にては志を果すことができません。ましてやまこれですの衆の御寄捨を何度もむだについやしましたからには、今回も又前回同様に失敗しますれば、何の面目あって御奇特な皆々衆にお目に

かかることができましようぞ。そこでじゃ、
儂は今日こそは鑪を開くに当って、灼けた鉄
の中へ飛んで一命を捧げる覚悟であります
る。こうすることにより、一つにはこの老衲
の僭上を諸仏菩薩にお詫び申し上げ、二つに
は皆様がたに儂の真心を現わそうと思います
のじゃ。もし大仏様がみごと完成致しますれ
ば、五十年の後にこの儂がきつとうわ屋をお
建て申して進ぜましよう。」

どよめきが渦の様にひろがって行った。は
ては感動のあまりに声をあげて泣きわめきな
がら、

「やめて下され、老師さまあ！」

と、叫ぶ者もあったが、澄空は耳をかさない
で屹と立っていた。愈々灼熱した黄金色の鎔
鉄が鑄型へと流れこんで、目も眩むばかりの
白熱の液体が空をおどる様に進ばした。こ
の時、澄空は手を振って別れをつげるしぐさ
をしたかと思える間に、飛鳥の様に鑪の中へ躍
りこんで消えたのである。

鑪を開いてみると、今度は成功であった。
端巖微妙な御相好の鉄の大仏が見事にそこ
におわしたのであり、それこそ微細な髪

の部分までもすっかりそなわっているお姿で
あった。

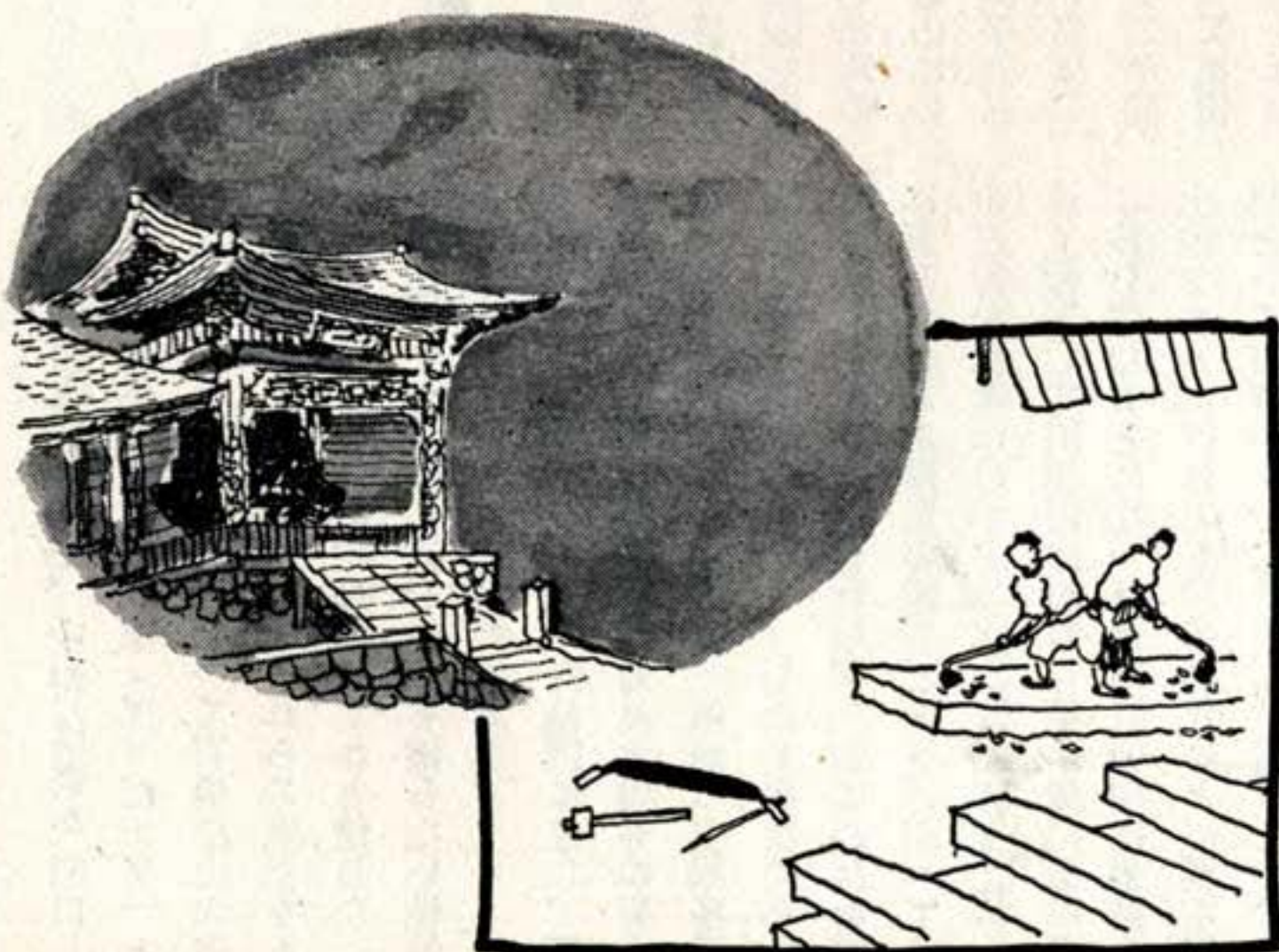
その後、并州の人々は誰でもみな、何とか
して上屋を造営して大仏にかぶせ参らせんと
考えたが、何しろ仏牀が余りにも
大きいし、莫大な経費が必要なの
で、よほど財力のある者でなけれ
ば上屋造営のことなど及びもつか
なかったのである。

唐の開元の初めに、李嵩という
人が天平軍の節度使として着任し
て来たが、出遊して当地へやって
来た節に、この大仏を仰ぎ見て、
「これほど立流な御相好の御仏が
風雨にさらされたままでおわしま
すのは、何とも勿体ない痛ましい
ことじゃ」

と歎息した。そして早速、錢七
万緡を寄進することにしたので、
一年と経たぬうちに重層の上屋が
落成したのである。北部で平等閣
と呼んでいるのがこれである。沙
門澄空が一身を投じて仏像が出来
した日から数えると、この李嵩に

至るまでで丁度五十年であった。仏教流にこ
れを解釈すると、この李嵩こそ澄空その人の
後身ではなかったらうか？

唐・薛用弱「集異記」より



近代高僧伝

角谷隆音伝



矢矧川が静かに北から南に流れて、衣ヶ浦

いな一徹なところがあった。

にそそぐ三河国大浜の老舗「茄子のからし漬」の本家に隆音が孜々の声をあげたのは文
化十四年（一八一七）三月二日のことであつ
た。父を角谷重次郎と言い、その弟に念仏の
行者として名声をはせた徳住がいた。隆音は
重次郎の次男で兄弟は八人居り、長兄は三津
四郎、姉を志希といい、三人目に生れたのが
茂三郎であつた。茂三郎こそ後の隆音であ
り、弟に吉之丞・重三郎・周治郎があり、妹
に智恵と寿得がいたが、信仰の家に育つた兄
弟たちは、共にすぐれて賢く、信仰心が厚か
つた。とりわけ茂三郎は学問を好み、賢かつ
たので、伯父の徳住にみこまれ、その弟子と
なつたけれども、性格は豪放で、負けずぎら

九品院に入り徳住について修行を積んだ
後、一時江戸に出て伝通院の学寮に学び、宗
戒兩脈を相承し、以来師に随従して諸国を行
脚し、洛南菱川の西向寺に滞在していた時の
ことである。毎朝二時に起床して比叡山にの
ぼり、講義を聴いて帰ってくれば既に午後五
時もすぎているという修学の雄々しい姿は、
夏といわず冬をもいとわず続けて凡そ二年間
ばかり継続されたということであり、又粟田
定信院にいた時、中將鳥尾得庵と議論をたた
かわせ、口角泡をとばしたが、中々決するまで
に至らなかった。そのため立腹した隆音は、
やにはに中將の面前でお尻を捲り、「ナニク
ソ汝はこのけつを喰へ」といって、大きなお

尻を差し出されたので、中將は聊か閉口し
「イヤドウモ、これは豪傑（尻）だナア」と
叫ばれたということを、曾って石橋淨山大僧
正から聞いたことがある。これらの逸話をも
つてしても、如何に、自分のこれと信じたこ
とは飽くまで、押し通し一步も譲らない性質
であつたかを知ることができよう。

徳住の寂するに及んで、九品院に住し、第
三世の法燈をついだが、時適々大樹寺の裏山
の利権に関する問題がおき、岡崎城主本多氏
と抗争することになった。しかし利欲にから
む本多氏の態度にあきたらず、遂にこれを官
に訴えたところ隆音の勝訴となり、却って藩
の迫害を受けたので、九品院にいたたまれず、
遠く西下して阿波国に至り、壁ヶ嶽の徳円寺
に移り住むことになった。阿波の地は未踏の
土地であつたけれども、幸いなことに藤右衛
門という信者がいて、貧しい徳円寺の上人に、
毎日食事を供養し、隆音もまた其の行為にこ
たえるべく、念仏の行を修し、浄土の弘教に
つとめられたということである。隆音が徳円
寺に來た当初には徳円が在住していたが、数

年にして徳田が病歿されると、彼は九品寺から硯成を呼びよせて、共に修行にいそしまれたらしい。

以来阿波のみならず、大阪浜の源光寺、高津源正寺・宗全寺・八幡正法寺・栗田定信院等を歴住し、最後の董住地として寺町聖光寺に住したのは、明治十二年（一八七九）五月であつた。この頃仏教徒の考えていた世界観というか、天文学はどうであつたろうかと言うに、宇宙の真中に須弥山があり、その頂上に極楽が、地下に地獄があつて、須弥山の周辺を太陽と月が運行し、須弥山の四方に四大陸があり、更にその周辺に鉄围山があると考へられていた。しかし西洋から新しく輸入されたコペルニクスの地動説は全く、仏教の考へとは違うもので、地球は球体であり、太陽のまわりをまわっているというのである。これだけならば枝葉の問題として終るであろうが、実は心ある仏教徒としては容易ならぬものがあつた。というのは地動説を理由に仏教の説くところは虚妄であり、經典に記されているすべては真実でないという儒学者・国学

者・神道学者等のこぞつて放った声であつた。ここに排仏を強く主張する原因があつたのである。ことここに至つては仏説の正しい所以を是非とも論証しなければならないという必要にせまわれて、經典をひもどき、梵曆の研究を志した人も少なくなかつた。隆音も其の中の一人であつた。

隆音が梵曆という曆の研究を思ひつたのは、どのような動機からであつたか詳しく知ることは出来ない。普門が文化六年（一八〇九）の春「仏国曆象編」五巻を選述してより以来、梵曆に関心をもつものも次第に多くなり、自から江戸京都名古屋の辻に立つて梵曆を講じたこともあり、門弟は各地に派遣されて天動説の正しき所以を、仏教をまもるために懸命に説いてまわつたのであつた。その頃普門の説に共鳴した心ある人達は、梵曆社を結成していたが、その支部は名古屋にも置かれていた。隆音の師籍地に近い松応寺には普門の結盟する梵曆社中同人として活躍し、「閻浮提図附日宮図」「世界大相図」等を行して梵曆の弘通につとめた転誉存統が居住

していたので、隆音も自然、梵曆に耳を傾けるようになったのではあるまいか。

彼は座敷の中央に、須弥山の模型を安置して、日月星宿の運行を示すと共に、種々の説明書をつけて、一般の人達にも関心をもたせるようにし、更には此の學問を盛んにするには学校を建てるにしかずといつて、梵曆学校を寺町聖光寺の門前に建設することにした。所が既に準備もとのい、巨石木材が多く集められ、愈々明治十六年（一八八三）五月十四日着手と決定された矢先、知恩院での講演を終えて寺に帰るや否や急に不快を感じ、遂に病床の人となり、腦溢血のため、病の床にあること四日、希しくも着手の日に當つて遷化せられた。時に歳六十七、法名を演蓮社説譽上人神阿隆音本円老和上と言ひ、明治維新の混乱した世相の動きの中に、護法運動に身を以てつくした功績は、極めて大きなものがあつた。

〓

〓

法華經

——經典解説(四)——

かへりても入そわつらふ真木の戸を

まとひ出にしところならひに

せつかく帰ってきてても、邸の戸口でためらっている。そのむかし、迷いでた心の習性がまだ残っているものだから、と慈円の兄、覚忠が法華經信解品の気持をよみ、その歌が千載集にのっている。その信解品にはどんな内容が記されているのであろうか。

ある父子が住んでいたが、一人息子はどういうわけか父親を捨てていずこかえ去ってしまった。それから何年かの歳月を経たが、父親は大金持となり、息子は貧しい姿で町から



町へと衣食を求めてさまい歩くようになっていたのである。こうした流浪の揚句のはてに、ついに父の住んでいる町に到達した。かねてから父親は「年老いた今、自分の財産をどこかにいる息子に渡して、心安まりたいのだが」と物思いにふけていたところへ、貧しい姿をした一人の男が門前にやってくるのを一目見て、この変りはてた男が自分の子であると見極め、従者に連れてくるよう命令した。門前にきた息子はあまりにも立派で威風堂々とした邸宅や行列に驚き、このような所にみすばらしい私がたたずんでいたら、どんな禍がふりかかるかもわからないと、あたふ

た。門前にきた息子はあまりにも立派で威風堂々とした邸宅や行列に驚き、このような所にみすばらしい私がたたずんでいたら、どんな禍がふりかかるかもわからないと、あたふ

たと去って行った。後を追った従者がその息子連れて来ようとする、どんな目に会わされるやらとびっくりして息子は氣を失ってしまった。これを見た父親は自由にさせるように命じ、氣がつき次第に去らせてやった。しかし、父親は方便を用いて自分の家の掃除夫として息子を雇うことに成功した。そうしてその中に、息子に欲しいものがあつたら何でもすぐ申しでるよう伝え、息子は黙々と二十年間、掃除夫として働いたのである。いよいよ死期の近づいた父親は子供を呼び、倉庫にある品物やお金の在り場を教え、それを守るよう命じたが、子供はその逐一を充分に知っていても少しも損失せず、僅かの食物の代価も要求せずに、自分の与えられた貧しい小屋の中に居住していた。これを見た父親は、親戚・国王・大臣や名士たちを集めて「この男は実に私の子です。私の所を去って五十年もたちましたが、今この子に私の全財産を譲ろうと思います」と告げた。この父親の愛情に対して息子は感涙にむせんだというのである。この物語は有名な法華七喻の一つで、一般には「長者窮子の喩え」と呼ばれている。し

かも釈尊が「火宅三車の譬喩」を説かれ、仏の真意を知った弟子たちが、この譬喩をもつて仏に申し上げたのである。それではこの譬喩は一体何を意味しているであろうか。譬喩は単なる物語でも寓話でもなく、その底には深い意味が蔵されていなければならない。法華經を知るにはまずこの譬喩の真意を把握することから始まると言えるだろう。

この物語の後で、弟子たちは釈尊に「長者は仏陀の喩えであり、窮子は私たちです。私たちは長い間、二乗貧困の窮子としてさ迷い続けていましたが、今や釈尊の愛情を知りました」と喜びの言葉を述べている。大乘仏教は小乗の偏見を打破しようとして生れた新しい行き方であるが、大乘經典の中には小乗の徒をこっぴどく叱りつけている表現をするものもある。それに対し、法華經は法にかなっていさえすれば、どんな立場の者でも仏の恩寵にあずかることを力説している。「生きとし生けるものは仏性がある」ことを力強く説き、たとい小乗の徒であっても成仏できることを知らせている。しかし、人間は迷妄の世界に沈潜していて、真実の姿をなかなか知

ることができない。それゆえにこそ、「方便」によって真実を知らせる必要がある。これが愛情からほとばしりてた釈尊の心情であったのである。「うそも方便」という軽々しい言葉ではない。真実という愛情にみちた裏づけから生じた方便でなければならぬのである。仏陀の大慈悲から考えれば、小乗の偏執を排斥することが本意ではなく、声聞や縁覚と呼ばれる二乗の人々であれ、菩薩であれ、一様に成仏し、大悟に到達せしめようという念願がなければならぬ。非難されがちな二乗の人々も、悉く皆一乗の妙理につかせようとするこの經の面目が、經中の王と称せられる一大原因を作ったのである。

法華經二十八章は増広されて成立したものと伝えられているが、法華經の精髓は一体どこにあるのだろうか。我々凡夫は仏性を有し、仏になる能力を具えながらも、煩惱に覆われてそれを擲むことが困難である。しかしちっともその真価は変りない。これは丁度、泥中にありながらも少しも汚濁に染まらない清らかな蓮華のようであるということから「妙法蓮華」と呼ばれるところに既に大きな意

味が含まれている。法華經の意義の一つは既に述べた、声聞・縁覚・菩薩の三乗の道が別個であるという誤りを正し、人によって能力に多少の相違はあっても、それもこの世のあらがままの姿であり、しかもそのままが差別のない成仏できる一乗の大道であることを知ることにある。またその二は八十歳で入滅された釈尊は歴史的事実であるが、その釈尊の教えはそこで滅したのではない。永遠の法をただ発見したにすぎないと釈尊が言われている通り、歴史上の釈尊を通して久遠の仏陀を眺めようとするこの二点にあるだろう。

ひるがえって再び長者窮子の喩えを見れば、仏陀の愛情は迷妄に覆われた子供を方便によって成仏させることができたことを意味している。自分にそのような能力がないと一人で勝手にきめている誤りを正したものである。この譬喩をもとに中国の天台大師智顗は有名な五時教判を組立てたのである。即ち仏陀は最初、華嚴經を説かれたが、低劣な人々にそれが理解できず、そこで次に程度をさげ、阿含經を説き、次に方等・般若と説き、晩年に法華經を説いたのが、かの窮子が親の

心を了解できず、逃げ出して、やがては再び戻ることになるのと同じしているとする。しかし、これは智顗の教判であって史的事実ではないのである。以上の「生きとし生ける者に仏性あり」とする考えは「方便品」を中心としたもので、藥草喻品に説かれる「汝等の所行は是れ菩薩の道なり」の一語に尽きるであろう。自らを卑下し、自らを自慢する人々を善導する釈尊の心根は我々の行動がそのまま仏の道にかなっているとするのである。

さて、この前半の経意は少くとも我々の頭にすなおに受けとることができるものであるが、後半の描写は実に思いもかけない展開を示してくれるのである。数々の驚くばかりのことを示した釈尊と弟子たちの眼前に地面の下から無数の菩薩たちが現われる。この思いがけない光景を目撃して弟子たちが釈尊にその理由を尋ねると、仏陀は「これらの人々は、私がこの娑婆世界で教化し、道心を起された方々である」と答えられた。これに対し「仏陀は説法をされて四十余年しか経たないのに、どうしてこんなに多数の人々を教化されたのか。若い青年が百歳の老人を指して

自分の子だといい、老人もまた青年を親だという。さっぱりわかりません」と尋ねたので、その理由を厳そかに話された、これが「寿量品」である。

「お前たちは私の成道をガヤの菩提樹下で初めて悟ったと思つてはならない。實際は無量億劫の遙か昔になしとげていたのだ」と言われたのである。私たちは仏教というものが釈尊の発明と考へてはならない。釈尊は自身、「只單に法を発見したにすぎない」と言われている。法は永遠でなければならぬ。しかもその法は仏と一つとなったものである。もしも仏が作られた法ならば、とてもそれを後世に残すことも不可能であるし、仏と共に法を滅してしまふであろう。永遠の法が輝いている所には、どこであつても仏が躍動している筈である。この「寿量品」にはしかも、「わが寿命は永遠である」と宣言している。今まで述べきった神話的な仏陀は実は「永遠の生命」であることを明らかにしたのである。釈尊とは永遠の生命そのものである。そこには「仏」とか「法」とかの区別は存在しない。従つて歴史的に実在した釈尊は

確かに現象的には死んだであろうが、本質的には死んだと言えないどころか、脈々と生の鼓動を打ち続けているのである。これが「久遠実成の仏」と言い慣わされている言葉の本質である。

泥中にあつても汚れることなき蓮華とは煩惱に覆われた人間に変わらない仏性を見出すことと述べたが、それでは法華經の真意は非常に消極的なものとなつてしまふ。従つて「妙法華」のもつ意義は「この世の中でありのままの生活をしながら、菩薩の行を實踐し、平凡な生活の中に本当の生きがいを見出すこと」でなければならない。方便品に説く「如来は諸法を知る」ことは「ありのままの生活を如実に知ることにはかならない。「存在(諸法)とはどのようなものであるか、存在とはどのような属性があるのか、存在とはどのような特性があるのか、それらの存在において如来は目のあたりに知っておられる」(十如是の梵文の意味)と説かれているのは単なる理屈ではない。ありふれた平凡な生活の具現こそ一大肝要事である。平凡な生活はできるやうでできるものではない。法華經の信者

宮沢賢治は「雨ニモ負ケズ」で法華經の精神を見事に掴まえている。

ミンナニデクノボウトヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

ありのままに生きる。そこには真実であって永遠な生命が自分と一つになって受けとることができらるであらう。誰からも苦にされない生活、それでいてその人がいなければ歯車の抜けたような感じを与える。まさしく永遠の生命を自分の生命としていることになるではないか。だが、それには我々のいらぬ迷い、いたずらな分別心が生ずる。それを捨てなければならぬ。それには多くの辛い体験が必要である。それを教えるために、種々の菩薩が法華經に現われてくる。その中の代表的な者の一人に常不輕菩薩がいる。

増上慢の比丘たちが多数いる時に、この菩薩は出家であれ、在家であれ、誰にでも合掌礼拝して「私は深くあなたを敬い、軽んずるようなことは致しません。あなたはやがて仏

となられる方です」と言い、どんなに悪口を浴せられても平気で拜んだという。これも単なる物語ではない。デクノボウ呼ばわりされても実行力によって人間のもつ苦悩を解決する努力がなければ法華經の真意も消えて行く。生活に即した真実の教え、それが法華經の特質である。あるがままが真実である（諸法実相）ということも、永遠の生命を知った時に、初めて言葉としてではなく、自分の中に生きている法華經を知ることになる。

「娑婆即寂光土」の名句もこの世が本当に寂光の土であると開顯できるように思われる。

法華經は聖徳太子の講ぜられた經典としても有名であり、龍女の如きものでさえ成仏できるとしても知られている。現存する漢訳は三本あり、その中で最も流麗なものは姚秦の羅什の訳で、今に至るまで広く使用されている。梵文の刊本にも三種あり、特に興味を引くのは浄土教との関係である。漢訳にはないものの梵文の普門品には法藏比丘、無量光仏のことが記され、他の章の無量寿仏や仏を念ずることなどに関連して極めて密接なものであることを知ることができる。（石上善応）

小さい御出家

まるいすげ笠 勢至丸さま

比叡のお山へのぼられる

山はきれいな 雪のひだ

春風 寒うありました。

父の仇など とおい夢

かたい心で登られる

青い湖 志賀のうみ

白う光っておりました

どうぞご無事でお母さま

美作のくに さようなら

霞む山みち 路のとう

小鳥も啼いてゆきました

（安藤尙之介 童謡選集より）



絶対の世界

須藤隆仙

絶対の世界

治承四年、上人四十八歳の時、あの有名な奈良の東大寺が兵火で焼けたのであった。平家と源氏の争いのますますはげしい時である。思うに上人の出生した時代は、平安から鎌倉に移る過渡期で、実に変動のはげしい濁乱の時代であった。藤原の実権が衰え、保元平治の乱によって平家の全盛時代となり、さらに源氏の勃興によって平家は亡び、鎌倉に幕府が開かれる、といった時代であるから、その動乱のいかにはげしいものであったかは容易に想像される。特にこの頃天災地変が多く、悪疫、飢饉等のため死者続出、戦争と天災とのために誠にこの世ながらの地獄絵巻をくり広げていたのである。このような時代に生を受けた上人が、ああした真剣な求道を続けられたのも、多分にこの時代的背景が強く影響したと想像されるのである。

それはともかく、この東大寺の焼失について、上人は後白河法皇から、その再興の勸進を命ぜられたのであった。しかし上人は、自分は念仏の弘通だけで精一ぱいであるか

ら、といって辞退し、この役を門弟の俊乗房重源にゆづられたのである。

後、上人は文治二年五十四歳の御年、各宗の学僧三百余人を相手に、大原の勝林院に於て大法論（宗論）を展開されたのであった。世にいう大原問答これである。この時右の重源は弟子三十人を率いて上人の警固に当たったといわれる、他の弟子達も参集したといわれる。この法論で各宗の学僧は上人の学徳に驚き大いにこれを賞讃し、三日三夜の念仏が続けられたと伝えられている。

建久二年五十九歳の御年、上人は東大寺に於て、浄土三部経の講義をされたのであった。これは重源の発願によるものであり、奈良の三論・法相両宗の学僧達を含めた二百余人の聴衆を相手に、浄土三部経を中心に念仏の法門を説かれたのである。この時も聴衆の中には、何か誤りがあったら恥をかかせてやろうと敵視しているものもあったが、上人の御説は恂々として人々の胸をうち、その説くところは一々もつともにも仏陀本来の慈光を開顯したのである。

一体先の大原問答といい、この東大寺の講

説といい、当時としては大変な出来ごとだったと思われるのである。これまで永い間権力をほしきままにしてきた既成の仏教に対して、上人のそれは、新興の仏教だったからである。旧いものを破って新しいものが芽生える時の苦難は、何にあっても容易なものではない。

恐らく上人のそれは旧仏教にとっては驚天動地のできごとであつたろうし、それだけに旧仏教の圧力も相当なものだったであろう。

こうして上人の仏教、念仏の教えは、京都や奈良の旧仏教界の大御所に一大旋風を起す結果になったのである。

各宗の大学僧何百人をも相手にして対決するということは、いくら秀才であつても容易にできるものではない。

しかし上人は立派にそれをなしとげられた。しかも相手を信服せしめたのである。勿論中には相当の義憤を以って対処した者もあり、そのようなことが、やがて後の法難となつて現われるのであるが、とにかく表面立てられた場では、上人の新説に誰もが黙し込んでしまったのである。

これは皆、上人の説く所が、深い体験と、広い学問とを基にし、更には尋常ならざる苦悩を克服して、そこから生れ出たものだったからなのである。即ち血の出るような道の探求の結果、真の大真理としての救済一道を発見された結果なのである。

実にここに住する上人こそ、絶対の世界に念仏する上人だったのであり、この絶対の世界には、誰人たりとも抗することができなかったのである。

この喜びのために

建久九年、御年六十六歳、上人は『選択集せんたくしゅう』という御書物を著わされたのであった。略して選択集ともいわれている。これは上人に深く帰依していた九条兼実の要請によるものである。この書は実に、念仏の教え浄土宗の根本を、組織的に体系づけたものであり、浄土宗開宗宣言の書とまでいわれている大事な書物である。内容は十六章からなり、浄土の法門の大切なわけ、念仏の功德、念仏者の心構え、念仏者の行い、その他仏教の中に於ける念仏の地位や、釈尊から今日に伝え

られるまでの経緯、更にはこれが絶対救済の教えとして選り出された「選択」の意義等が述べられ、誠に整然たる一大念仏体系とでもいふべきものである。この書の草稿となったものは先の東大寺講説の講案だったとも伝えられている。

ここで上人のみ教えは、大原問答から東大寺講説、そして選択集選述、といよいよ学的基础を固めていったわけである。

ところが、こうした上人の教界進出は、忽ち旧教団の嫉妬するところとなつたのである。先にも述べた通り、正面きつて鋒先さきを向ける者はなかつたとしても、蔭での嫉妬はついに積り積つて、それが旧教団の弾圧となつて現われたのである。即ち法難ほうなんと呼ばれるものである。

その第一は元久元年、上人七十二歳の御時であつた。比叡山の衆僧がこの山の最高取天台座主ざいす真性に「念仏の停止」を訴え出たのである。上人は直ちに七つの制誡を作り、門弟達に署名させ、それを座主に進呈したのであつた。これは「七ヶ条起請文」といわれるものであるが、門弟達を誡め、更には念仏の正し

さを強調しているもので、当時既に門弟の中には念仏の教えを悪用する不心得者が出ておったのである。これも法難の一つの原因になったことと思われるのである。この制誡進呈、それに側面から兼実公の要請もあって、この件は一時おさまったのである。だが翌年又同様のことが奈良興福寺の僧達によって烽火を上げたのであった。

しかしそれも上人の真意が理解され、ことなく済もうとしている時、今度は実に困った問題が起き上ったのである。住蓮と安楽という上人の弟子達が、六時礼讃という有難いおつとめを修行した時、後羽鳥院の御所の女達が出家をしたということで、院の逆鱗にあり、住蓮安楽は打首、上人は土佐（高知県）へ島流しという大変なことが勃発したのである。

時正に建永二年二月二十八日、上人御年七十五歳を数える頃であった。

上人はその名も藤井元彦と改められ、僧籍をはがれて三月十六日京を出て配処へと赴かれたのである。門弟その他、上人を尊敬する人達の泣号の中に。

（童）（心）（仏）（心）

ほめ言葉

春子さんは、勉強の成績がよくありません。体だって、そう丈夫ではありません。ですから、自分でも、すっかり自信を失って、劣等感が小さな胸いっぱいに巣くっていました。

そんなある日、父兄の授業参観がありました。よその子は、ハキハキと質問に答え、ピチピチとはねまわっています。それらの父兄は、満足そうに目を細めて、わが子を眺

めていました。春子さんのおかあさんを別にして。

さて、その帰り道。父兄たちは、わが子の悪行の数々をならべたてながらも、内心、得意のおももち。

その時、春子さんのおかあさんはいいました。

「家の春子は、よそさんのお子さんと違って、なんのとりえもございません。でも、襟足だけは組一番でございましたわ。」

春子さんの家の商売は、芸者家でした。

（輝）

露の身は、ここかしこにて消えぬとも

心は同じ 花のうてなぞ

と、お浄土での再会を別れの辞とされたのである。（この御歌は特に兼実公に遺された、と伝えられている）何という尊いことであろうか。何という有難いことであろうか。

お念仏、唯お念仏、この喜びのために、この喜びの中に、上人は古稀をこえてなお勇んで配処に赴かれたのである。

浄土歌壇

山形野まきと代選



天

東京 牧尾有希子

かくて世にひとりの沙門生れしと
月は五更の中空を行く

評 深みがあつて、情趣そなは

ったよい歌です。今日一人
の人間が受戒をうけて坊さ
まになったのを、澄み渡つ
た空の月がちつと眺めてい
るというのですが、月では
なくて、母の心のように思
へます。

地

奈良 大口 善信

僧に聞き満洲人がするごとく穴ほ
り罫ふ畑に白菜

評 さっぱりして、何でもない

歌のようですが、自分の丹
誠した白菜を一冬保たせる
方法をたづねて、満洲帰り
の坊さんにきいて、極寒の
地の冬がこいの真似をした
と云うのです。淡々と歌つ

た中に矢張り修練をつんだ
歌のうまさがあります。

人

東京 久地楽真絲

春遠し花芽の数をかぞへつつ君が
残せし紅梅と住む

評 君が残せしとありますの

で、御主人に死別れた人で
しょう。さむざむとした冬
に、自分の心も春に遠い感
じがして心細いが、あなた
の遺愛の紅梅の咲くのを待
ってせめてもの慰めとして
いるというやさしい心持を
うたっています。

兵庫 白岩 好子

霜枯るる萱野にさせる陽のうすく
畠うつ鍬の石に鳴るなり

東京 小宮 みつ

悲しくも春まつ心友にあて我が母
の記をかきくどくかな

名古屋 中村いそえ

さくさくと凍れる菜漬齒にあてて
こたつに集ふ信濃路の冬

大阪 清水 幸治

二十年のキリスト教すて仏受戒
うけて亡き子のあとを追ふかな

兵庫 岸部かずえ

雪解をまちて冬木の手入れなす母
一人には広き果樹園

川内市 串岡 君江

「嫁の身の悲しき時は萩にたつ」
妹が運命を句にしのお夜半

東京 張山はるみ

春立てど解き放たれて移り住む都
はわびし騒音の中

和歌山 中川 誠一

朗詠の声あでやかに楽しけれ「春
の落葉」を我も吟じぬ

東京 石谷 てい

身の丈は母をはるかに越えし子の
うなじに残る幼さいとし

東京 家田 ふゆ

遠き海雲かとみれば雲のかげ海か
と思へば横はる雲

青森 向井 きつ

縁なくて嫁がぬ我をなげく叔母さ
りとして我は苦にもならざり

鹿児島 児島登喜子

南国に四十年振りの雪積り子ら喜
びてスキーを始むる

富山 水野その子

老母のみ手のかたさよ亡き人の子
等を育てし恩愛に泣く

東京 物部さよ子

水仙も座禪をくみて静まれる冬の
夕の瑞泉寺かな

鹿児島 長崎 恒子

夜風やや冷ゆれど足もとに寄する
汐なほ暖し去りがてに立つ

松江 吉田 弘道

荒海や境港の青潮に防波石堤なが
ながと伸ぶ

藤沢 熊沢 満

護摩を焚く火より折々飛ぶ火の紛
小さく舞へる須弥壇の前

名古屋 堀江 恭子

花御堂可愛くおはすみ仏に薫る甘
露をそそぎまゐらす

東京 星野 千代

電車待つわが前を行く長き貨車屋
根によごれし厚き雪のせ

高岡 関 理一

立春やみ堂の隅に二つ三つ転びし
豆に光り射す朝

富山 竹上 盛衛

屋根に立ち雪を掻きゐしわが肩に
雲を離れし月光の射す

高岡 佐野 勝昭

慎重に舌を張りてくる菊があり夜
半の寝覚めの厭世の中

選者 詠

婚姻を祝ふ巷にさくら咲き太子と
妃馬車に行きます

扉の御法語解説

この御法語は小消息の一部ですから、御承知の方が多いと存じます。詳しくは「黒

田の聖人へつかはす御文」の中にあるお言葉で、この御文は一枚起請文と併び拝誦されています。従ってどの部分を抜き出してみても、いづれも上人の真隨にふれたもののみであります。またこの御文は勅修御伝第二十一巻にも出ています。そして御伝には、「此書世間に流布。上人の小消息といへるこれなり」とありますので、当時から広く拝誦されていたことがわかります。私たちは、とかく自分のことを棚にあげて他人のことをいい勝ちです。さもないことながら人間の弱点でもあります。十悪五逆のものですら往生できると教えられると、この位の罪なら許していただけ

ると安心してしまいます。しかし上人は十悪五逆すら往生できるという有難いお詞を拝すれば、どんな小さな「悪いこと」をも避けなければいけないと申されたわけ

です。一念十念のお念仏で往生できると教えられれば、百遍千遍位お念仏を申せば、もうよいと安心してしまいます。しかし上人は、一念十念が往生の行となるとの御詞をいただいたならば、お念仏を無間に限りなく申したがよいと教えて下さいます。

上人の御教えは、いつも凡夫が相手であり、慈愛のこもった温い御言葉で示されていますが、その底には、厳然たるもの、確固たるものが流れています。「小罪をもをかさじとおもふべし」お念仏を「無間に修すべし」のお言葉がそれであります。

「十悪五逆のもの、なをむまる」「一念なをむまる」と、私たちをしてホッとさせ、内心の悩みを軽くし、将来に対して一縷の

光明を見出させて頂きました。しかしその安心を、安易に楽しむことなく、非力なりにも私たちの精一杯の努力を傾けるべきことを示されています。

言葉は不便なものだとよくいわれます。一つのことをいうと、すぐこれに註釈を加えなければならず、言葉によって真意を伝えることは容易ではありません。十悪五逆のものも往生できるという反面に、小罪をも犯すなということは、言葉だけでみると矛盾しています。こうした言葉の足りないところを補うものは信仰であります。信仰と申しても自己流のものではいけません。上人の教えを基とした信仰でなければなりません。つまり御法語を拝誦して、言葉の上からだけ解釈しようとしては、上人の御心に近づくことはできません。まず御念仏を唱えてからのことです。

× × ×

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円（送料共）です。

◇会員には毎月「浄土」を配布いたします。

◇この会は皆様の会ですから、その発展の為にお一人でも多く

の会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申し込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

（送料 四円）

会費一力年

金六〇〇円

（送料不要）

浄土

六月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年五月廿五日 印刷

昭和三十四年六月一日 発行

定価 五十円

編集人

竹 中 信 常

発行人

佐 藤 密 雄

印刷人

神 谷 秀 雄

印刷所

神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所

法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

お母さまの童話

B 6判・二四〇頁
定価二五〇円・千三〇円

◇ママ、お話をしよう……とせがまれませんか？
そんな時に、この本一冊あれば、すぐ話せます。
◇幼稚園・保育園の、三年保育や年少組のお話に、
お困りありませんか？ 本書はそれを解決しま
す。

仏教保育二十章

B 6判・一九五頁
定価一八〇円・千二四円

◇単なる保育と仏教保育とはどう違うか。この仏教
保育の特色が如何に大切であるか……これを簡明
にまとめ、現行行うべき課程や必要な法規をつけ
加えた、仏教保育を行うための最良の手引き書。

東京都中央区京橋二ノ一（塩山ビル）

発行所 青山書院

電話京橋(56)〇七五四
五四九二
振替東京九九三〇三番

浄土宗教学院創立十五周年記念

甦えるいのち

B 6判 二七頁
定価 三十円
千八円

内容 体験

諸行無常のはなし 森 赫子

ひじり法然 武田 泰淳

佐藤 賢順

固渇した人生の旅路において、こんこんと湧き出づる泉をみ
出したよろこび、——体験のなかに求め得た宗教こそ、生々と
した、いのちを甦えらせてくれるのです。

単なる知解を排けて、その人の体験を通して語られた言葉、
如来の御前に直々に対決をした心境、そこには、こよなき感動
に胸をふるわするのであります。

浄土宗教学院が歩んだ、輝しい十五年の歴史を記念して企て
た特集のページを、ひもどくごとに、私たちは、人生に潤いと
やすらひを感じるのであります。

東京都品川区上大崎一の七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二、一八七番

長学校長 東京高等保育学校
教授 駒沢大学
理事 日本童話協会

著 内山憲尚先生の二名